

●「北海道の学校事務」の現在・過去・未来

〈第 7 回〉



温故創新(上)～財政財務活動

学校事務職員になって5年目の夏。「学校の生活環境に対する子どもたちの声を聞いてみたい」——。無性にそう思った時期がありました。

理由は二つありました。一つは全道事務研などで発表される「子どもアンケート」の実践に触発されたこと。特に同年代の多くの学校事務職員が、真摯にとりくみを続け、市町村教委に対する予算要求活動へとつなげていました。中には「こどもの権利条約」を意識した実践も報告され、日々を平凡に暮らす自分との距離を感じずにはいられず、何とかその距離を縮めたいという思いがありました。もう一つは、「子どもたちはどんな気持ちで学校生活を送っているのか」という素朴な疑問と、「大人では気づかないことを気づかせてくれるのでは」という淡い期待からでした。わずかな勤務経験しか無いのにも関わらず、「学校とは、学校事務とはこういうものだ」という固定観念やマンネリが自分を覆っていた時期でもあり、何とかそれらを打ち消したいという思いもありました。

校長には事前にアンケートに関する説明を行い、「アンケートの結果は子どもたちに知らせること」「実現不可能なことは、理由を明確にして説明すること」などを条件に、職員会議での提案を了承してもらいました。職員会議の当日、アンケートの目的や内容、結果の利用方法などを含め提案をしました。「小学校低学年でも答えられるか?」「現実離れた意見が出てきたらどうするのか?」などの質問はでしたが、特に意見はありませんでした。

では提案通り実施しても良いですね」という司会の発言の後、「私は反対です」——。少し間が空いて、タバコの煙でうっすらと白みがかかった職員室の奥の方から声がありました。ベテラン教員の宮崎でした。「北野さんが言うように、子どもたちは学校での生活環境に対して本当に意識なんてしているかな?」。「それはわかりませんが、今回のアンケートを通じて意識してもらえるかもしれませんし……」。私が答えると、宮崎は「皆さんが賛成なら致し方ありませんが、私は提案に納得できないので反対です」——。

■現在の財政財務活動

「北海道の学校事務」において財政財務活動は、学校事務職員の中心的な業務として位置づけられてきました。それは単に市町村経理の伝票処理のみに終始することなく、学校教育に必要な予算を調査・研究し、学校における財政執行計画を立案し、行政機関に対する要求活動を含め、子どもの学習に必要なすべての経済活動を意味するものです。

「領域」の提起以来30年にわたり、以下のような具体的観点にたちながら、財政財務活動が全道各地で精力的にすすめられてきました。

- ・ 自律的民主的な学校財政の運営を図る
- ・ 学校財政のサイクル化を図る
- ・ 組織的な予算要求活動をすすめる
- ・ 保護者負担軽減のとりくみをすすめる
- ・ 子どもをとりまく状況を把握し、子どもの要求をくみとったとりくみをすすめる…など

しかし今日、これまでと同様に財政財務活動をすすめるには大変厳しい状況にあり

ます。国の財政再建・行政改革がすすむ中、地方交付税交付金の削減・税収の落ち込み等に伴い、地方財政は悪化の一途を辿っています。教育予算も例外でなく、学校配当予算の削減や執行凍結、予算要求システムの休止という現実を見ても明らかです。「領域」が提起された頃には考えもできなかった地方財政の悪化は、財政財務活動の推進にも暗い影を落としているのです。

このように、財政財務活動はかつてない窮地に立たされていると言わざるを得ませんが、厳しい状況だからこそ、これまで重視してきた具体的観点に沿い、あらためて校内外において協力・協働による効果的な予算執行や学校運営について実践がすすめられています。逼迫する地方財政の中でも、知恵を出し合ったり・発想の転換をしたりと様々なとりくみがすすめられているのです。



写真提供：富良野市立樹海小学校 校長 久守清志

■現在進行形での財政財務活動

子ども要求アンケートの取り組み

江差町立江差北中学校 夏原茂樹

1 子ども要求アンケートの取り組みのきっかけ

生徒会活動について、担当者より「総会などでクラスからの意見や要望が出せるような取り組みをお願いしたい」との提案がなされました。子どもたちの自主的な活動を伸ばしたいと考えている教職員集団の共通の課題でもありました。その折、事務局として、「子ども要求アンケート」について生徒会として取り組んでどうかと提起してみました。しかし、子どもたちの自主的な活動として行うには教師側の指導が必要であり、実施に踏み込むまでには行きませんでした。

2 事務局として「子ども要求アンケート」に取り組む

学校予算の削減の中、事務の提案は節約のお願いばかりでした。しかし、発想を換え、学校の主人公である子どもたちの要望や意見を取り入れる取り組みから、学校財政活動を展開してみようと考え、「子ども要求アンケート」を実施してみました。実施にあたっては、職員会議で、「子ども要求アンケート」のねらいを理解してもらい、学校の中で、「設置してほしい物、買ってほしい物（理由をつけて）」また「壊れているところ、直してほしいところ」の2点について書いてもらうことにしました。結果は生徒数61名で重複をさけると50点もの要望がだされました。

まず、子どもたちの要求項目を整理し、安全対策や緊急度から「実施する事項」、要求の必要性などから「皆さんの意見をもう少し聞きたい」、学校では無理なので「教育委員会に要望としてあげる」、教育の内容にかかわる事項ですので「教職員で検討してみる」。また、「現状は無理」などの項目に分け、回答書をつくり、職員間で検討し、掲示板へ貼りだし、「事務だより」として配布しました。

3 成果と課題

子どもたちの反応については確認していませんが、「事務だより」を発行したその日、保護者より教頭に電話がありました。その内容は、「息子より学校のトイレが臭いという話しは聞いていた。今回の事務だよりにも子どもたちの要望としてトイレの消臭の

要望が出されていたが、私は清掃関係の仕事をしている。トイレの臭いは尿が石化し配管に詰まっているためにおこるもので、これを落とさなければ消臭剤を使用しても無駄だ。消臭剤は健康に良くないので私は薦めない。もし学校がよければ、清掃をしてあげたい」と申し出てくれました。このような保護者からの協力が得られるなど考えてもみませんでした。「子ども要求アンケート」の取り組みを通じて、保護者との情報のキャッチボールと協力を得ることができたのが大きな成果でした。今後、このことを事務だよりで知らせながら、学校と保護者の連携を図っていきたいと考えているところです。

子どもの意見を取り入れた学校事務をめざして

赤井川村立赤井川小学校 濱田恵美子

1 ねらい

「生活に根ざした学校づくり」の一環として、子どもの意見をアンケートで聞く機会を設けました。その理由は、従来、子どもの意見は彼らを取り巻く大人たちが、その意見や要望などを代弁する形ですすめられてきました。しかし、直接彼らの声を学校事務職員が聞いても良いのではないかと考えました。また、子どもたちは、何についても意見を反映させることが可能であり、その機会を増やしてやることで、「子どもの意見」が学校の構成員としての意見として保障されていければ良いと考えました。また、子ども自身も『自分たちの学校』という意識を強くすることで、自らの学校生活をふり返る機会になればとも考えました。

2 実践の経過

毎年、学校予算書づくりでは、教職員からの意見を中心にまとめていましたが、『学校を構成する肝心の子どもたちの意見を直接聞くことが必要ではないか?』と考えました。それらの機会を設けることで、より子どもたちに近づいた『学校づくり』になると思いました。また、子どもたち自身が自らの学校生活をふり返ることもできるのではないかと考えました。

子どもの意見は「アンケート」という形で集約し、その後の学校の対応としては、①すぐに実現できること、②教職員で話し合っていくこと、③子どもたちが話し合っていくべきこと、④今の学校では実現が難しいこと、という観点を事前に設け、教職員で論議しました。子どもの反応は、意見集約の内容に大変興味を持ったようでした。また、その後気づいたことを教えに来てくれることもありました。要求書づくりでは、子どもの意見を添付して町教委へ提出しました。

3 成果と課題

学校事務職員にとって子どもからの直接の意見は、大変新鮮なものがあり、『学校づくり』に対する気持ちを真摯にさせてくれる効果がありました。子どもたちが本当にまじめに学校をどうしたら良くなるかを考えていて、大人はその気持ちに十分答えてないことを気づかされました。いかに今まで机上の仕事に埋没していたかを反省させられました。教職員全体にとっても、子どもの実態を様々な角度から考えていく必要性や子どもが学校づくりに直接意見を言える場があることの大切さを認識することができました。初年度は対象を5・6年生にしぼり、翌年は1年から6年生にひろげ、子どもへのお知らせ方法も初年度は事務日より、翌年は学校掲示板をつかって紹介するなど変化を持たせて行いました。その後、転勤し、新たな勤務校ではまだ、子どもの意見を聞いていないのですが、是非また実践していくつもりです。現在、その準備段階として保護者向け事務日よりを発行しています。

■財政財務活動の過去の実践を ひもとく

財政的に厳しい状況の中でも全道各地で知恵を出し合い、発想を転換させたりしながら、財政財務活動がすすめられています。

確かに時代に即した形での「新しい視点」あるいは「新たなとりくみ」を模索することも必要ですが、ともすれば、時代の変化を気にするあまりの拙速な判断は、「大切な物」を見失うことにつながりかねません。

そうならないためにも、時代背景やとりまく状況は違うにせよ、これまで北海道で続けられ、積み上げられてきた実践や考え方を、あえてこの時期にひもとく必要があります。そして、その価値を北海道の学校事務職員の全員で確かめ合う必要があります。

何故なら、北海道の学校事務職員の根底に流れているものは30年の歳月が経った今でも変わっていないからです。先人たちは私たちのために、しっかりと道標を立ててくれているのです。

◆「物」へのこだわりの反省から「理想の教育環境」を求めて

南空知支部（栗山町教育振興会事務部会のととりくみ）

1 研究の課題

私たち（学校事務職員）は、ともすると「物的」なものに囚われ過ぎていたのではないかと、学校財政・財務の活動を「物」の整備、「物を買う」ということだけに矮小化していたのではという反省から研究をスタートさせる。（1987年度～1992年度）

教育環境の整備を主として「物的」整備としてとらえ、また、そのことだけにとどま

ってよいのだろうか。子どもたちにとって教育環境はどうあるべきなのか。教育環境をもっと広い視野でとらえ、学校や家庭、地域の現状や生活とのかかわりで把握できたら何かが見えてくるかも知れない……。だから、年次計画を立て「よりよい教育環境を考える」をとりくむこととなる。

2 年次計画の中でとりくんだこと

1 年次～現状の問題点を整理。「教育環境整備の実践において、私たちは物の側面からのみとらえてきてはいなかったか」「子どもたちの目の高さで現状を考えてみよう」ということで、小学生対象に教育予算・教育環境についてのアンケートを行う。

2 年次～子どもの意識の分析から「私たちとの物に対する意識のズレ」「物から遊べる場所・自然などに目が向いてきている」ことを強く認識。アンケート結果を教職員に紹介するとともに教職員にもアンケートを実施。これから「教職員みんなでとりくむ糸口」ができ、さらに「民主教育をすすめる住民会議」へ問題提起。子どもの要求・考えを予算要求に活かす手立ての研究を行う。

3 年次～中学生対象にアンケートを実施。その結果、子どもたちは「生活の場としての学校」を無意識的に感じ要求に反映、大人たちと噛み合わない部分もあるが、「与える・押し付ける教育」から脱却し歩み寄り、この差を埋めていく必要があることを強く認識。

4 年次～子どもたちの要求の再度の分析と検討を行う。予算要求への反映をどうとりくむべきか。(例：小学校～自然学習、理科飼育学習、校地環境づくりなどへの展開。中学生～生徒会活動と連携した予算要求活動の展開、等)

5・6 年次～教育環境についての保護者へのアンケートのとりくみ。結果を集約し保護者向け事務だよりとして発行。さらに「住民会議」へ紹介と提起を行う。

3 とりくみの成果と課題

ア、子どもたちのアンケート結果などから、子どもの目の高さを意識した予算要求活動へ展開していくこと。自然・緑を意識した環境づくりを望む声が多いことを強く認識する。

イ、教職員へのアンケート結果などから、全教職員ですすすめる学校事務のあり方を探っていく必要があること。さらに、とりくみを町・地域へと発展させる必要があること。

ウ、住民会議での論議、保護者へのアンケートの結果から、学校事務と保護者・地域との関わり合いを考察、実践の課題としていくこと。校下の実状を要求に反映していくこと。

エ、その他 提起からとりくみの中で、各校孤軍奮闘、マンネリ化の予算活動をサー

クル共通の課題として論議、発展性あるとりくみとして各方面に提起できたことが大きな成果と考えられる。

「次に——ファミコンは自分の家で遊ぶ物だと思うので、残念ながら学校では買えません!」。「ハハハァ! 誰だよ～そんなの書いたの～! ?」。体育館に笑い声がこだましました。宮崎の反対を押し切る形で実施されたアンケート終了後、子どもたちに対し、結果を説明する機会を持った方がよいとの意見が職員会議で出て、全校朝会の中で時間を少しもらいました。

「アンケートに協力してくれてありがとうございます。みなさんからの意見や要望と、それに対する返事は全て職員室前の掲示板に貼ってあります。先生方だけでは気づかなかったこともたくさんありました。すぐに直したり、買うことができないものもあるけど、どうしたら学校が過ごしやすくなるか、これからも学校のみinnで考えていきましょう」——。体育館の後方で、腕を組み、目を閉じながら私の話を聞いている宮崎の姿が見えました。

「子どもアンケート」のとりくみには満足をしました。予算要求につなげる云々よりも、子どもたちはアンケートに真剣に答えてくれました。それは、子どもたちが真剣に学校のことを考えてくれたことに他なりません。その答えに対し、こちらも真剣に答えました。全ての答えに目を通し、返事を考えるという作業は、量的にも質的にも大変でしたが、やりがいのある作業でした。同時に、簡単に「子どもの目線に立つ」と口にしますが、その難しさと大切さを実感しました。その後数年間「子どもアンケート」を続けましたが、日常のふれあいの中で、十分子どもの意見に耳を傾けられる極小規模校への異動を機とし、「子どもアンケート」は実施していませんでした。

とある正月、校長となった宮崎から届いた年賀状にこんな添え書きがしてありました。「北野さんのものをマネて、子どもたちに教育環境に関するアンケートを行いました。やっぱり子どもは鋭い視点を持っていますね」——。なんと宮崎は私が行ったアンケートを十年もの間、保持していたのです。驚きと照れくささとが交差する不思議な気分の中、「久しぶりに子どもアンケートをやってみようかな」——。忘れかけていた何かを思い出しながら、そんな気持ちになりました。

〈参考文献〉

- 北海道の学校事務 ー深化・発展する領域ー
／北海道公立小中学校事務職員協議会編（2006年）
- 北海道の学校事務 ー第2集ー
／北海道公立小中学校事務職員協議会編（2008年）
- 学校事務労働の現状と課題（第7集）
／北教組事務職員部職務確立検討委員会（1994年）
- 学校事務労働の現状と課題（第10集）
／北教組事務職員部職務確立検討委員会（2004年）

〈イラスト〉 村山悠子
(札幌市立元町中学校教諭)

